トキ 野生復帰に向けて ⑥

「国内における野生復帰の取り組みについて」

けがをした野生の動物を治療して再び野生に戻すという野生復帰は、従来から行われてきた野生生物保護の取り組みの一つですが、絶滅にひんした動物を増殖し、野生に戻すという野生復帰（「再導入」などと言われる）の試みはあまり多くありません。

特に、野生で絶滅した鳥類を野生復帰させる取り組みは、国内ではまだ前例がなく、今年の秋に試験放鳥が予定されている兵庫県のコウノトリが国内初ということになるでしょう。

コウノトリはトキよりも大型の鳥類ですが、同じコウノトリ目（もく）に分類される仲間同士です。トキと同じように、田んぼや川などの水辺にすむ生きものをえさにしています。まれに冬鳥として日本に渡来し、昨年は新潟県内にも1羽やってきました。日本で繁殖する個体群は昭和46年に消失しましたが、ロシアから贈られた個体の飼育下での増殖が進められており、平成14年には飼育羽数が100羽を超えました。

コウノトリの野生復帰に向けては、平成11年に兵庫県立コウノトリの郷（さと）公園が開園し、調査研究や普及啓発に取り組んでいます。平成15年には、コウノトリ野生復帰推進計画が策定され、官民一体となって野生復帰を推進するための体制としてコウノトリ野生復帰推進連絡協議会が発足しました。この組織を核として、転作田のビオトープ化や松林・河川の整備など直接的なコウノトリの生息環境の整備だけでなく、コウノトリをシンボルとした農作物の生産・販売やまちづくりなど、野生復帰の実現に向けた取り組みを展開しています。コウノトリを一つのきっかけとして、様々な主体が各自の得意分野で活動し、お互いに連携しながら、より豊かで安心な地域づくりが推進されています。

このほかの取り組みとして、海外ではアメリカシロヅル、ハワイガン、レアサンガモ、カリフォルニアコンドル、ホオアカトキがあります。この中でホオアカトキについては、佐渡トキ保護センターでも飼育されていたことのある種で、ヨーロッパから北アフリカに生息しています。野生復帰の取り組みとしてトルコ、イスラエルで放鳥を行い、野生の群れに合流しましたが、まだ野生種が増殖してきている状態ではありません。

一度絶滅の危機にひんした種を元の状態に復元していく野生復帰には、多くの難題があり、一朝一夕に成し遂げられるものではありません。特にその原因に人間が係わっているために、私たち人間の理解なしでは進まない取り組みとなっています。

コウノトリと同様、里地里山を生息場所とするトキもまた地域との共生なくしては、野生復帰は実現しません。トキの野生復帰を一つのきっかけとして、佐渡をより豊かで魅力ある地域としていきませんか。

環境省自然環境局北関東地区自然保護事務所新潟支所

トキのヒナが生まれました

4月19日(火)18時56分、トキ「№20♂（新新）」（2000年生まれ）と「№48♀」（2002年生まれ）のペアの卵（3月23日産卵）から今年最初のヒナがふ化（人工ふ化）しました。

今年は7組のペアが繁殖を行っています。

（写真提供　新潟県佐渡トキ保護センター）